

タツパーに一首

児玉かつ 宮城

まなぶたが重くなる午後ふるさとの菜の花の道あゆみはじめる  
子の家とわが家のあひだタツパーの大き小さきが行つたり来たり  
料理などできなくなつたらタツパーに一首を入れて子に渡すべし  
延命の治療のぞまぬ年寄が真紅のバラに水切り三たび  
右向きに寝るときいつも目眩するいよいよ「日本会議」を憎む

牡丹花の息

鈴木絹子 栃木

下枝より小さくゆれて若葉風涼しき水脈を曳きてひろがる  
牡丹花の開かむとする深き息夜明けの星が聞きて消えたり  
八重桜すでに散り敷き花びらはさざなみなして地を吹かれゆく  
翡翠のたちたる水や虹色に気化して高く空に消えたり  
眠りとは痛み苦しみ煩らひもわが上過ぐる一切空寂

妻の実家

中津川 勤 坐 埼玉

へとき不<sup>へ</sup>通、老いら<sup>ら</sup>竹み<sup>み</sup>児らの泣く大宮<sup>大宮</sup>駅で椅子をゆづらる  
遅れたれど読<sup>よ</sup>経の了ひよく聞<sup>き</sup>けり義母の十三回忌法要  
四季を映<sup>うつ</sup>す権<sup>ごん</sup>ノ神岳<sup>かみ</sup>あふぎこし妻の実家は令和に絶ゆる  
義父義母は思はざりけむベルリンに孫の住むこと加茂を去ること  
結納に父母と来し家その門<sup>かど</sup>の高き馬酔木の花とも別る

風景の痛点

小島 なお\*東京

雨ときに声、声ときに雨となり時間は濡れる濡れながら過ぐ  
膝に置く帽子に空が匂いつつスクリーンの淡いひかりを浴びる  
夏の夜は油のような静けさで不安をまたも組み立てはじむ  
風景の痛点として自転車を見ていたことも恋に纏わる  
いそがしくしている方が楽だよと水匂う地下改札に消ゆ

喉笛うごく

柴田 佳美 東京

英単語カードは白き指先で捲られるうち蝶となりたり  
初夏にスイヘーリーボーボクノフネ諳んじる子の喉笛うごく  
潮舟の並べとめるヘアピンが五月に光る黒髪のうちへ  
長音の潮のささやき短音の本草の笑ひこの身を包む  
ポピー園より橘媛の玉御髪おもひ眺める走水の海

何が変はる

立花 純子 新潟

昨秋にとりそこなひし竹垣の朝顔のつる卯月にはづす  
朝顔の蔓をたぐればひとふゆを雪にあたりし種がこぼるる  
杉の山茶色になりてばふばふと花粉飛ばせり去年より多く  
平成が終はる終はると騒ぎあるテレビを消して洗濯物干す  
天皇が替はりて何が変はるのか友の病は進行しゆく

柴犬クリ

三浦陽子 長野

新しい家族ができたといふ義姉の家に柴犬クリを見にゆく  
初めてのわれに吠えない犬なれば番犬失格柴犬クリは  
小柄なる義姉は抱くなり愛犬をほとんど同じ大きさにの  
勝ち負けに遠く生き来て朝ごとのスポーツ欄に勝ち負けを読む  
透けるほどやすいハンカチ携へる女はそれほどはかなくはなし

あなたの名

白川 ユウコ\*静岡

レゴひとつ土踏まずにて踏みし感「お子さんは」などときどき訊かる  
被害者を産むかもしれない加害者を産むかもしれない妊娠したら  
あなたの名知りたいのですあなたの名 道綱母、孝標女  
駅弁の東海軒の鯛めしの黄色の木綿の紐もちかえる  
歩いてるようで後退ムーンウォークしてるとみたいだ安倍晋三は

軍手をはめて

森田治生 三重

職を退き三百六十五連休 十連休も凡々と過ぐ  
六十年前と変はらぬフォルム良し三角定規、コンパス、分度器  
四年生のわれにあらずやコンパスで円を描きある傍らの児は  
軍隊がなくなり七十四年なり軍手をはめて松をととのふ  
水張り田となりて五日目いづくより来たる蛙かはづか闇を騒がす

自治会長

小坂 喜久代 兵庫

寝転んで内館牧子読む午後よ『すぐ死ぬんだから』ピンポンが鳴る  
あぢさゐがスタンバイして雨を待つ夫無き日常四年目に入る  
夫逝きて夫のふるさと遠のけりべんがら格子も備中神楽も  
さざ波の寄せるすずしきさま見せて夕日の池は鴨を遊ばす  
公園のノラに餌をやり自治会長合間あひまに懸垂をする

いささ群竹

有川 知津子 福岡

竹の花ほそくかほそく垂れゐたりミルクの多いオムレツのいろ  
親の竹枯るれば株を離れたる子竹も果てぬころの不思議  
閉園の音楽ふいに鳴り出でて竹の空洞すこしふくらむ  
淋しさうな顔はしてゐず亡き祖母の庭にのびあるいささ群竹  
包丁を砥ぎゐたる手をやすめれば月かかりをり挿絵のごとく

いのち

吉里 幸雄 福岡

八日<sup>やぶ</sup>前冠動脈の手術終へ「令和」へこえしわれのいのちは  
生きもののよろこぶこゑは甲高しけろけろひびく嫩葉楓に  
緑陰の木のベンチまでたどれたり風やはらかなここに憩はな  
グラマンの機銃掃射をにげのびし記憶ひそめるこのいのちなり  
此処いらでもういいのかも棹ささず笹舟のごと流れてゆくも